

## 正徹「草根集」命名の背景―白詩の利用

丹羽博之

### 要旨

進士科の受験勉強に励んでいた白樂天は十六歳の時、長安に赴き、ときの大詩人顧況に面会する機会を得た。その際、「賦得古原草送別」の詩

離離原上草 離離たり 原上の草  
一歳一枯榮 一歳に 一たび枯榮す  
野火烧不尽 野火 焼けども尽きず  
春風吹又生 春風 吹きて又た生ず  
遠芳侵古道 遠芳 古道を侵し  
晴翠接荒城 晴翠 荒城に接す  
又送王孫去 又た 王孫を送りて去り  
萋萋滿別情 萋萋たるに 別情滿つ

を見せた。五代、王定保の『唐摭言』巻七には以下の逸話を載せる。

白楽天初めて挙げられるや、名未だ振るはず、歌詩を以て顧況に謁す。況之に諱れて曰く「長安は百物貴し、居るに大いに易からざらん」と。讀みて「原上の草を賦し得たり、友人を送る」詩に至るに及び、曰く「野火烧けども尽きず、春風吹きて又た生ず」と。況之を歎じて曰く、「句の此の如きあらば、天下に居るも甚の難きこと有らんや。老夫の前言は之に戯れしのみ」と。

これが出世作となり、以後、楽天の名声は一挙に高まったという。彼の早熟の才を示す有名な逸話である。

ところが、この詩が平安文学には利用された形跡は未見である。今回、「草根集」の序を読んで、当該詩の利用が有ることに気づいた。「草根集」の序は一条兼良の手になる。それには、東山の正徹の庵が全焼し、蔵書・草稿が灰燼に帰したことを踏まえて、

心に根ざせる思ひの種を、ややもすれば言の葉にあらはれて、切れども失せず焼けども尽きせず。秋の霜を置いては枯れはつるやうなれど、春の風に吹かれては又もえいづるに似たるゆゑに、草根となづけられける

とある。一読、前掲白詩に拠ることは明らかであろう。「野焼きの火が焼き払っても尽きることなく、春風が吹くとまた新芽が生ずる。」一度は焼けてもまた生える野草のたくましさと正徹の家集を再編集する不屈の精神が重ねられている。それゆえ、「草根集」の命名も白詩に基づく。これらのことを中心に「草根集」と白詩の関係について私見を述べたい。

キーワード：正徹・「草根集」・白楽天・「白氏文集」

## 一 正徹と「草根集」

室町時代を代表する歌人正徹については幾多の先学の考察があり、彼自身大変有名な歌人であるが、最近では日本文学者の専門家も少ないように感じられるので、正徹及び「草根集」について簡単に解説する。

【正徹】室町前期の歌僧。字は清岩、また清巖。号は松月。東福寺の書記であつたので世に徹書記という。歌を冷泉為尹・今川了俊に学び、沈滞した当時の二条家の歌風を排し、定家への復帰を強調。その歌は夢幻的・象徴的。歌集「草根集」、歌論書「正徹物語」など。(一三八一～一四五九)

【草根集】正徹の家集。正広編。文明五年(一四七三)の一条兼良序がある。丹鶴叢書本十五卷十五冊。後半生約三〇年の詠約一万一〇〇〇首。

(以上『広辞苑』)

## 二 白楽天の「賦得古原草送別」詩

進士科の受験勉強に励んでいた白楽天は十六歳の時、長安に赴き、ときの大詩人顧況に面会する機会を得た。その際、「賦得古原草送別」(〇六七)の詩

離離原上草 離離<sup>り</sup>たり 原上の草

正徹「草根集」命名の背景―白詩の利用

一歳一枯榮 一歳に 一たび枯榮す

野火烧不尽 野火 焼けども尽きず

春風吹又生 春風 吹きて又た生ず

遠芳侵古道 遠芳 古道を侵し

晴翠接荒城 晴翠 荒城に接す

又送王孫去 又た 王孫を送りて去り

萋萋滿別情 萋萋たるに 別情満つ

『白氏文集』は那波道円本による。作品番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』所収の「綜合作品表」による。

を見せた。五代・王定保の『唐摭言』巻七には以下の逸話を載せる。

白樂天初拳、名未振、以歌詩謁顧況。況譔之曰長安貴百物、居大不易。及誦至賦原上草送友人詩、曰、野火烧不尽、春風吹又生。況嘆之曰、有句如此、居天下有甚難、老夫前言戲之耳。

(本文は『四庫全書』による)

白樂天初めて挙げられるや、名未だ振るはず、歌詩を以て顧況に謁す。況之に譔れて曰く「長安は百物貴し、居るに大いに易からざらん」と。讀みて「原上の草を賦し得たり、友人を送る」詩に至るに及び、曰く「野火烧けども尽きず、春風吹きて又た生ず」と。況之を歎じて曰く、「句の此くの如きあらば、天下に居るも甚の難きこと有らんや。老夫の前言は之に戲れしのみ」と。

これが出世作となり、以後、樂天の名声は一挙に高まったという。彼の早熟の才を示す有名な逸話である。その他、白樂天のこの詩に言及する記事は、

唐・張固『幽閑鼓吹』

宋・呉曾『能改齋漫録』卷八

宋・范晞文『対牀夜語』卷三

明・蔣一葵『堯山堂外記』卷三十二

等の諸書に見える。

### 三 「草根集」序文

古原草の詩は、白の早熟の才を示す逸話として後世喧伝されたが、この詩が平安文学に利用された形跡は未見である。今回、室町時代の正徹の「草根集」序を読んでいて、当該詩の利用が有ることに気づいた。「草根集」の序は一条兼良の手になる。それには、東山の正徹の庵が全焼し、蔵書・草稿が灰燼に帰したことを踏まえて、以下のように述べる。

草根和歌集は、招月庵正徹老人の詠藁なり、かの老人のかきなさせる水茎の跡をうかかひみるに、はたちあまりよりよみをける歌二万六七千首、三十余帖におよべりといへるは、五十とせあまりの事にや有けむ、かくて八そちにいまとせたらすして世をさり給へれば、そのあひだにつもれることの葉、かれこれかきあつめあみととめたらば、ふての塚をなし紙のあたひをたくせむ物をや、しかあれど東山のふもと草の庵の焼け野のくさとなりにしちなみに、和歌の浦のもしほ草もおなしけふりに立のほりしこそ、いひてもかひなくおしみてあまりありしか、そのうち手箱のうちにのこれる玉をひろひあつめたるは、九のうしの一すちの毛にもあたらすといへと、猶十四五巻はかりそありける。俊頼朝臣の散木、吉水僧正の拾玉といへるぞ、譌かすなとも世にすぐれて見およひし、いまこれをおもへは物のかすにもあらざりけり、そもく宇治山の喜撰は、わつかに一首もて六人の中に名をのこしけるは、世あかりての事なるへし、すゑの世となりては、いかにもそのかすをよみてこそ、みつからのさえのほれ、唐の太子賓客は、たわれたること葉をもて仏をほめ法をひろむる縁としても、七千の巻となして世にのこしけらし、まことに一ことにてたりぬへくは、なにをして木

のはのもしをうつして花のこと葉となしても、五千あまりの巻のかすをひろむや、老人の朝夕の三昧をつたへきくに、此道をはなれては心をわくるかたもなし、ねにふしとらにおきても出雲の雲にのそみをかけ、薪をはこひ水をむすひても難波のなみに心をよす、しかのみならずところ所の春のあそびにいさなはれては花の本の客となり、家々の秋のえんに侍りては月の前の友となる、人丸あか人のふるき風をあふき、定家々隆の妙なるすかたにふけらすといふ事なし、さるにても此集をなつけしことをたつめるに、そのかみ此道にをきて物うきことのありしおりくは、なかく筆をたちた、ちに跡をけつらんとおもへれと、心に根ざせる思ひの種を、ややもすれば言の葉にあらはれて、切れども失せず焼けども尽きせず。秋の霜を置いては枯れはつるやうなれど、春の風に吹かれては又もえいつるに似たるゆゑに、草根となづけられける。こゝにかの小師に正伝といふ僧あり、此集を世にひろめたき心さしあるによりて、つたなきおきなにちからをあはせこと葉をくはへよとありしかは、いなどはいひかたくてやむ事をえす、させてふ虫のさせるふしはなけれども、綴りの袖の綴りをけるになむありける、時に文明五の年文月の末つかた、桃華の三閨禪人これをするす。

私家集大成「草根集」

とある。一読、前掲白詩に拠ることは明らかであろう。「野火烧不尽、春風吹又生」(野焼きの火が焼き払っても尽きることなく、春風が吹くとまた新芽が生ずる。)一度は焼けてもまた生える野草のたくましさと正徹の家集を再編集する不屈の精神が重ねられている。それゆえ、「草根集」の命名も前掲白詩に基づく。正徹の白詩に対する深い知識無くしては、命名されないことである。従来の和歌文学研究者、正徹の研究者が気づかなかったことであろう。

「心に根ざせる思ひの種」↓「ややもすれば言の葉」↓「切れども失せず焼けども尽きせず」↓「枯れはつるやうなれど、春の風に吹かれては又もえいつるに似たる」↓「草根となづけ」と和歌の縁語的表現を見事に使いながらも、白詩をさりげなく引用する文章力の高さに敬服する。

「草根集」の「根」は序文の「根ざせる」から来ていると考えられ、「心根」「根性」「性根」「岩根」「息ね」「島根」「山根」等の語と同じく、和語である。『万葉集』には三例の草根がある。

君がよもわがよも知るや岩代の岡の草根をいざ結びてな（巻一・一〇・中皇命）

君之齒母 吾代毛所知哉 磐代乃 岡之草根乎 去来結手名

みつみつし久米の若子がい触れけむ磯の草根の枯れまく惜しも（三・四三五・川辺宮人）

見津見津四 久米能若子我 伊触家武 磯之草根乃 干卷惜裳

貌鳥の間無くしば鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも（一〇・一八九八・作者未詳）

容鳥之 間無數鳴 春野之 草根乃繁 恋毛為鴨

（本文・訓は新編日本古典文学全集による）

「草根集」は、主に語調を整える和語的な「根」に白詩の不死鳥の如き「春草」のイメージを重ね合わせたと考えられる。平安時代には「草根」の例は未見であり、漢語としての「草根」の例は見いだしたがたく、『万葉集』以来の和語「草根」のイメージを伴いながらも、白詩の表現を巧みに用いて命名されたものと言えよう。先行研究で「草根集」の命名の由来について説いたものは管見の及ぶ限りでは未見である。

#### 四 その他「草根集」「正徹物語」と『白氏文集』

その他、「草根集」と『白氏文集』との関わりを示す例を挙げる。

##### ①「草根集」序文（但し、一条兼良の手になる）

正徹「草根集」命名の背景―白詩の利用

唐の太子賓客は、たわれたること葉をもて仏をほめ法をひろむる縁として七千の巻となして世にのこしけらし、とあるが、唐の太子賓客は、白楽天のこと。『白氏文集』（巻七十）の「酒功賛并序」に、

唐太子賓客白楽天亦嗜酒 作酒功讚以繼之 唐太子賓客白楽天も亦た酒を嗜んで 酒功讚を作りて以て之に繼ぐ

とある。この佳句は、『和漢朗詠集』にも採られている。更に同集には、藤原篤茂の詩句として、

#### 四三二

晋騎兵参軍王子猷 裁称此君 晋騎兵参軍王子猷 裁ゑて此の君と称す

唐太子賓客白楽天 愛為吾友 唐太子賓客白楽天 愛して吾が友と為す

篤茂

として収められている。『和漢朗詠集』により、「唐太子賓客白楽天」の語は人口に膾炙したためか、日本ではその後、唐太子賓客白楽天の呼び方が一般化した。

『本朝文粹』にも、以下の例が見える。

「唐太子賓客白楽天」 三二一「冬夜守<sub>三</sub>庚申」 同賦「修竹冬青」 応<sub>レ</sub>教」藤篤茂

「詠<sub>下</sub>唐太子賓客之於<sub>二</sub>慈恩寺<sub>一</sub>所作 紫藤花落鳥関関」 三二二「三月尽日遊<sub>三</sub>五覚院」 同賦「紫藤花落鳥関関」源順

「写唐太子賓客之北窓」 三二四「暮秋陪<sub>二</sub>左相府書閣<sub>一</sub>」 同賦「寒花為<sub>レ</sub>客裁」 応<sub>レ</sub>教」江匡衡



更には、和文の世界にも、「唐太子賓客白楽天」は現れる。

『平家物語』（卷三・「大臣流罪」）「彼の唐太子賓客白楽天、潯陽江の辺にやすらひ給けむ其古を思遣り」

『源平盛衰記』（卷十二・「大臣以下流罪事」）「大臣彼唐太子賓客白楽天の元和十五年の秋、九江郡の司馬に左遷せられ」

謡曲『白楽天』『唐の太子賓客』

等がその例である。

一方、中国では後世、白楽天を「唐太子賓客」という呼び方は定着しなかったようである。彼の晩年の親友劉禹錫も「唐太子賓客」であつたし、歴代の「唐の太子賓客」がいたからでもあろう。『四庫全書』『四部叢刊』には「唐太子賓客」の例はいくつか検索されるが白楽天を指すことは殆ど無い。むしろ、白公と呼ばれることが多く、「小畜集」「林和靖集」等に白楽天を白公と呼ぶ例が見える。また、四川省忠州には、現在も白楽天を祀る白公祠があり、洛陽郊外の龍門にある墓も「唐少傅白公」とある。

②「草根集」には白詩に基づく歌題も散見する。

留春春不住 春を留むれども 春住まらず

春婦人寂寞 春歸りて 人寂寞たり

「落花」(二二四〇)

の詩句から、次の歌題が生まれた。

春不留

一九四六 暮れて行く霞の袖はひかふとも春の衣はてにもかからじ

留春不駐

一九四七 春ぞ猶ひま行く駒の行くことはまさきの綱もつなぎとめじ

国歌大観「草根集」

まだ、十分に「草根集」を読んでいないが、彼の詠草の中には白詩の顕著な影響は認めにくい。「春不留」の題は定家等にも好まれていた。以下その例を挙げる。

「拾玉集」卷四・春・一九二〇

留春春不留 春婦人寂寞

惜しめどもとまらぬ今日は吉野山梢にひとり残る春風

「拾遺愚草員外」四二〇

留春春不留 春婦人寂寞

恨むとてもとの日数の限りあれば人も静かに春もとまらず

次ぎに、『正徹物語』と『白氏文集』との関わりを示す例を挙げる。

145

定家の申されけるは、「歌を案ぜん時は、常に白氏文集の「故郷母有秋風涙、旅館に無人暮雨魂」の詩を吟ぜよ。この詩を吟すれば、心がたけたかくなりて、よき歌のよまるるなり」云々。「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」の詩を吟ぜよ」とあり。「旅館無人暮雨魂」といへる、旅の宿にただ独りゐたるに、ほろほろと雨のうち降りたるは、誠に心細き物なり。「なき人こふる宿の秋かぜ」の歌は、この詩の心になひたるなり。

\*本文番号は、小川剛生訳注『正徹物語』（角川文庫・二〇一一年）による

こうした例からも、正徹の定家や『白氏文集』への傾倒ぶりが窺われる。なお、「故郷母有秋風涙、旅館に無人暮雨魂」の詩は、実は白

詩では無く、『新撰朗詠集』（巻下・行旅・源為憲）所収の源為憲の作である。この詩句は『了俊弁要抄』も白詩としており、当時は白樂天の作と信じられていたらしい（小川剛生訳注『正徹物語』注）。

また、『隠涼軒日録』（延徳三年（一四九一）五月四日条）には、正徹は「蘭省花時錦帳下」如き和歌を詠むことが望みであったと伝えられる。正徹は定家を通じ、白詩の世界への愛着は強いものがあつた。（小川剛生訳注『正徹物語』補注）

参考…『愚見抄』には、次のようにある。（小川剛生訳注『正徹物語』補注）

常によき詩を吟じて、心をすますべき也。詩は心を高くすますものにて侍るから、

「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」此の詩を亡父卿は詠ぜられし。「故郷母<sub>レ</sub>有秋風涙、旅館に無<sub>レ</sub>人暮雨魂」これ又すぐれたることにて、感を動かすたぐひなり。白氏文集の中に大要の巻あり。常に披見せよと古人も申しためる。

\*『愚見抄』定家に仮託された歌論書。鎌倉時代後期の成立。鵜鸞系偽書の一つ。

## 結 び

正徹は定家を崇拜しており、定家が愛読した『白氏文集』を当然読んでいたはずである。そうした『白氏文集』への親しみが草庵焼亡という悲劇に遭遇したとき、白詩が脳裏に浮かび、自分の不屈の精神に重ね合わせて「草根集」と名付けたのであろう。草庵焼亡という悲劇がなければ、白詩に基づく「草根集」という命名も無かつたであらう。

正に人生万事塞翁が馬である。

\*本稿は和漢比較文学会第四回 特別例会（中国西安市西北大学・二〇一一年九月三日）において発表したものに基づく。発表後多くの

方から有益な質問・助言を得たことにお礼申し上げます。

### 付、白詩「野火烧不尽」詩の後世への影響

①松本一男『中国故事国故事一日一話』(PHP研究所 一九八九年 六六頁)には、当該句を挙げた後に、次のような記述がある。

中国人民の抗日意識の尽きないのにも使われた。

②平川祐弘『平和の海と戦いの海』(新潮社 一九八三年 二〇八頁)には、次の記述がある。

ここに伝聞であるので確証はないが、その挿話の一つを引くと――

日本の海軍省の建物はその年の五月二十五日の空襲で全焼した。米内光政海軍大臣はその海軍省敷地内の大防空壕で空襲のない時も執務していたが、六月初旬、第三国を仲介とする和平の動きが見られ始めた頃、山梨大將がぶらりと訪れた。米内は山梨の四期後輩に当る。かつて山本五十六とともに三国同盟に一番反対したのはこの米内であった。山梨が米内の血圧を心配するというと、米内は、

「いやあ、海軍省まで焼かれるようでは、自分の体なんか考えてはおられませんよ」と答えた。すると山梨が急に思いもよらぬ話題に転じた、「君、白楽天の詩を読んだことがあるかね。ぼくはいま白楽天を勉強しておるがね、いい詩があるよ。」

野火<sup>のび</sup>焼ケドモ尽キズ、春風吹イテ又生ズ

まあ、今は焦つてもどうにもならない。焼野の草も、いずれ春風が吹けば、また生ず、さ。なあ君、白楽天はよいこと言っているじゃない

いか」

それだけいうと——そしてそれだけでその場に居合わせた人々には山梨大將が和平を大臣にすすめているのがわかったという——山梨大將は祝田橋の方に歩み去った、というのである。またその前後に山梨大將から白樂天の詩句を聞いた人の中に高木惣吉海軍少將もいた。少將は日記（『高木惣吉海軍少將覚え書』毎日新聞社）にその詩句を書き記した。

離離原上草 離離たり 原上の草

一歳一枯栄 一歳に 一たび枯栄す

野火烧不尽 野火<sup>のび</sup> 焼けども尽きず

春風吹又生 春風 吹いて又た生ず

丹羽注：野火は「ヤカ」と音読すべきであろう。

正徹・山梨大將ともに、焼け跡からの復興に白詩を引用して、不屈の精神を表した点で共通すると言えよう。十五世紀の著名な歌人と二十世紀の海軍提督とが、共通して焼け跡から白詩を連想し、白詩に託し再建に思いをいたしている。平安時代に限らず、白詩が日本人の心を打つ理由はこうしたところにもある。但し、十六歳の白樂天はこの詩にそうした不屈の精神を詠み込んでいるかという点、それは別の問題であろう。

この詩については、以下のような解釈がある。

この詩句を含むものとの詩の題では「賦して古原草を得たり。送別」となっている。送別というテーマで何人かが詩を作りあったときに、白居易には「古原草」という題があつたのである。従つて、この詩句は、春草が燃え尽きないよう、自分の離別の悲哀もまた尽きないの意を言外にこめる。

鎌田正・米山寅太郎『漢詩名句辞典』（大修館書店 一九八〇年 一二頁）

題詠詩であることから、この解説の方が的を射ていよう。白楽天の意図とは別に「野火烧不尽」の詩は、断章主義的に後世に愛唱されていった。

白楽天没後千二百年も経った二十世紀に、「野火烧不尽」詩は蘇る。それも、日中戦争中や第二次世界大戦最末期において日中両国民の不屈の精神の象徴として白詩は詠われた。

#### 後書き

正徹が眠る東福寺の栗棘院に、大手前大学で同僚であった故鈴木亨氏のお墓もある。それが縁で正徹の墓にも参ることができたし、ふとしたことから「草根集」を読んでみて、白詩の利用に気が付き本稿を著すことができた。鈴木氏の霊前に本稿を捧げたい。